模擬国連会議全米大会
第39代日本代表団派遣事業
ガイドブック

The 39th Japanese Delegation to the National Model United Nations Conference Project

目次

■ 運営統括挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

■ 全米団派遣事業とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

■ 模擬国連会議全米大会とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

■ 全米団の活動について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

■ 渡米前

- ■ 選考プロセス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
- ■ 団員育成プログラム(DDP)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
- ■ 政策発表会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

■ 渡米

- ■ 提携校交流・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
- ■ ブリーフィング・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
- ■ 全米大会出場・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

■ 渡米後

- ■ 事業運営・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
- ■ 第39代運営局紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
- ■ 運営役職紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

■ もっと知りたい全米団！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

■ Dear Future Delegates・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

■ よくある質問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

■ HP・SNSのご案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

■ 助成財団・後援先紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44

運営統括挨拶

皆様、こんにちは。模擬国連会議全米大会第39代日本代表団派遣事業運営局にて運営統括並びに団長を務めております、細郷有希乃と申します。

全米団は己の成長に絶好の機会です。全米大会に向けた政策立案や学生のみの事業運営など他ではなかなか体験できない貴重な経験を積み重ねることで新たな自分に出会うことができます。しかし、団員期と局員期の双方からなる約2年間の活動を全力で取り組まなければその機会を最大限に活かしきることはできません。

そのため、アプライを検討している方は大学生活のうちの2年間を全米団にかけたいかどうか、是非このガイドブックを読んで考えてみてください。「挑戦してみたいな」と思っていただけたら、私は全米団が全力で取り組む環境を提供することは請負いますし、局員一同、執筆者冥利に尽きます。

このガイドブックが手にとってくださった皆さんに全米団を知っていただくきっかけとなれば幸いです。

2021年7月

模擬国連会議全米大会第39代日本代表団派遣事業

運営統括・団長　細郷有希乃

全米団派遣事業とは

全米団派遣事業とは、日本模擬国連(JMUN: Japan Model United Nations) に所属し、模擬国連活動を行う全国の学生の中から選抜された９名程が、日本代表団としてニューヨークで開催される模擬国連会議全米大会に参加する事業です。当事業は、日本模擬国連の主催事業の一つであり、多くの財団様や企業様、顧問の先生方やJMUN会員の皆様の御支援の下、前年度に選出された派遣団員によって運営されています。1983年に第1代が派遣されて以来、今年で39年目となります。当事業で派遣された日本代表団は、過去参加した37回の大会中24回、2008年から新型コロナウイルス感染症(COVID-19)拡大のため中止となった2020年を除いた2021年まで13年連続で表彰されており、毎年高い評価を得ております。今年度も最優秀大使団賞(Outstanding Delegation Award) という名誉ある賞を受賞しました。

全米大会に向け、派遣団員は渡米前に団員育成プログラム(DDP: Delegates Development Programme)に参加し、政策立案能力をはじめとした、集団討論やプレゼンテーションのスキルなど全米大会、さらには社会で役立つ能力を身に着けます。その後、渡米前の政策発表会にて、自身が全米大会で提案する政策を発表し、顧問の先生方からの助言を基に全米大会へのブラッシュアップや最終調整を行います。渡米中は、提携校の生徒と政策調整、全米大会への出場に加え、国連職員の方からブリーフィングをしていただきます。渡米後は、次期派遣団員を大会に派遣する為に、DDPの設計、資金管理、渡米の引率など、一つの大きな事業を運営することになります。このような運営の活動も含め、当事業はここでしか得られない貴重な経験を提供するために努力しております。

また、当事業のOBOGの方々は、国連職員、国家公務員、大学教授、弁護士のほか、様々な企業に就職され、国内外問わず多方面でご活躍されています。

模擬国連会議全米大会とは

模擬国連会議全米大会(NMUN: National Model United Nations Conference in New York)は毎年3月下旬からから4月上旬頃に、アメリカのニューヨーク市内のホテルと国連本部の会議場を使用して開催される模擬国連の世界大会です。今年度は史上初のオンライン開催となりました。

本大会は、世界中で行われている模擬国連会議の中でも世界最大規模を誇る大会であり、アメリカを中心に世界30カ国以上から5000人以上の学生が参加します。例年20もの国連機関や国際機関の模擬会議が設定されており、参加者は国連加盟国やオブザーバー、あるいは非政府組織の代表としてそれぞれの会議に参加し、議論、交渉を行います。全米大会は毎年大変な盛り上がりを見せており、国際的な評判も高まっています。

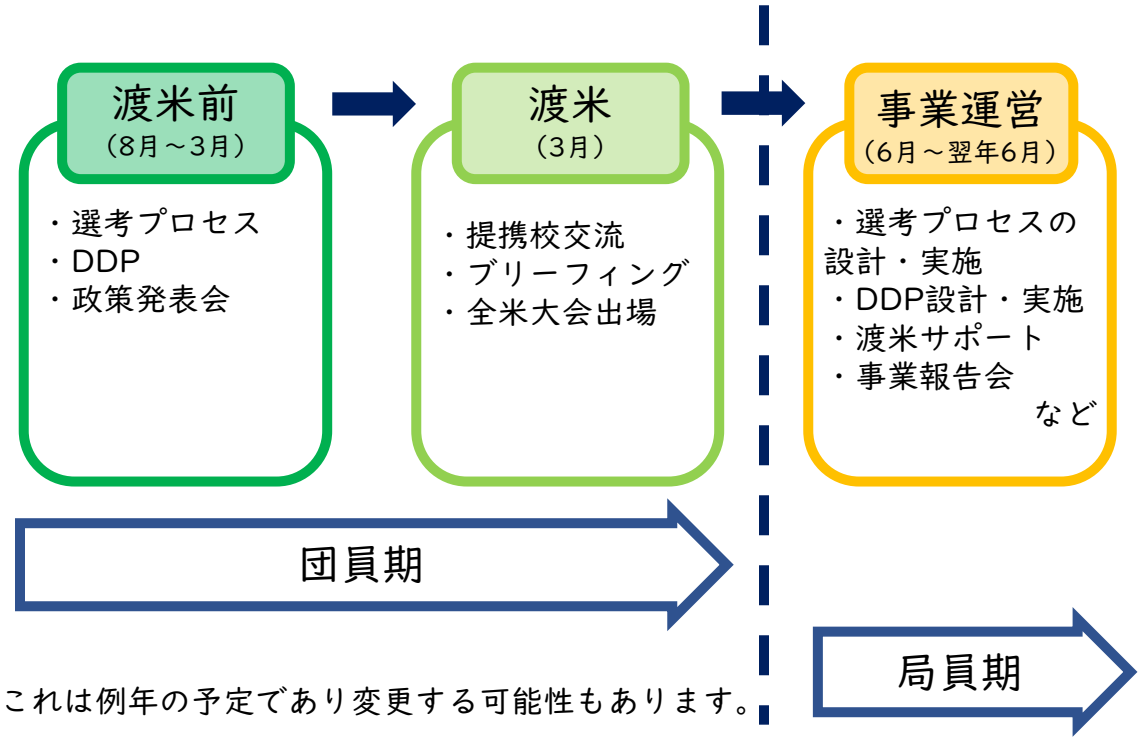
今年度の日本代表団の参加議場は、国連総会の各種委員会や国連開発計画(UNDP)、国連環境総会(UNEA)、国連世界食糧計画(WFP)、国連工業開発機構(UNIDO)、国連人口基金(UNFPA)、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)、NPT運用検討会議、などでした。

全米団の活動について

全米団では、派遣団員(通称:団員)と運営局員(通称:局員)で構成されており、その活動は大きく「団員期」と「局員期」に分けられます。

「団員期」では、選考やDDP、政策発表会などの全米大会に向けた準備期間である渡米前活動を経て、渡米します。渡米期間中には、提携校交流や国連職員の方からのブリーフィング、そして全米大会へ出場します。

団員としての活動を終えると、「局員期」が始まります。「局員期」では、次期団員の選考、渡米のサポート、また全米団の活動を支えるための渉外活動などの事業運営を学生の手だけで行います。また、前年全米大会の中止を受け、今年度は例外として局員も全米大会に参加しました。



これは例年の予定であり変更する可能性もあります。

渡米前

・選考プロセス
・DDP
・政策発表会

選考プロセス

～全米団への第一歩～

選考プロセスは例年9月から10月の約2カ月に渡って実施されます。例年、論文課題や対面式の面接、対話型コンテンツ(関西・関東で実施)等が選考課題として課されますが、選考課題の具体的な内容は毎年変わります。また、全米団の選考プロセスは単なる新団員の選抜のみでなく、応募者にとっての成長の機会になることが期待されます。選考期間中は優秀な他の応募者と切磋琢磨できるとともに、選考プロセス終了後には今後に役立つフィードバックが応募者全員に対して行われます。

選考プロセス担当より

選考プロセスは孤独な戦いです。時間も限られ、絶対的に正しい答えは存在しません。しかし、現実の政策立案者・問題解決者が直面する課題もまた、同じように複雑多岐なものです。みなさんはその入口にいるのです。みなさんの「解答」を楽しみにしています。

(河島功弦)

団員育成プログラム（DDP）

～全米大会に向けた準備期間～

団員育成プログラム(DDP)とは、11月から渡米直前までの期間に行われる、全米大会への準備と団員の能力強化を主な目的とするプログラムです。全米大会への準備については、前年全米大会に参加した局員が中心となって、各団員が全米大会で担当する議題についての問題の分析、政策の立案のサポートを行います。また、団員の能力強化については、グループディスカッションやプレゼンテーション練習を通じて、主体的な思考力やパブリックスピーキング能力を鍛えます。

DDP担当より

私は、全米団の魅力は全米大会だけではなく、DDPでもあると考えています。皆さんが全米大会という「経験」だけでなく、多くの「能力」も得ることができるようにDDPを設計していきます。したがって、その能力獲得の機会を最大化できるよう、DDPを楽しもうとする意欲的な方々を歓迎します。一緒に頑張っていきましょう。

（吉田直樹）

DDP（局員からの声）

団員育成プログラムでは、団員と問題分析や政策立案についてのコンテンツに取り組む中で、意見を擦り合わせて効率的にまとめる方法など、有益な対話のための手段を習得しました。局員の方からは、議論の過程やその結果を改善する方法に関する意見をいただきました。特に団員・局員との議論の中で、自己主張に終始してしまいがちで議論を混乱させてしまう自身の性質を指摘されたことが、議論において目的を意識することの重要性に気づくきっかけになりました。向上心の高い団員と意見を交わしつつ、自己研鑽に励むことのできた環境は他では得難いものであるといえます。(國分理桜)

DDPを通して身につけた能力やノウハウは、全米大会だけでなく将来にも活かせる思います。私は全国から集まる優秀な学生とのディスカッションなどを通して、新しい価値観や考え方に出会いました。最初の頃は衝撃を受けたこともありましたが、様々なコンテンツをこなしていくうちに、鋭い指摘に耳を傾け、異なる意見を柔軟に受け入れられるようになりました。DDPは自分が持っている従来の考え方を見直す、とても貴重な機会です。それは将来社会に貢献できる人になるためにも役に立つ経験だと思います。(周雨臻)

政策発表会

～更なる成長へ～

政策発表会は、例年2月に行われます。約半年にわたりDDP及び個人DDPを通じて政策立案を終えた派遣団員の日頃の成果や全米大会に向けた準備の過程を報告する場であり、全米大会に向けて政策をブラッシュアップする場でもあります。

局員からの声

政策発表会に向けて、局員からのアドバイスはもちろんのこと、OBOGの方、もしくは団員からのコメントも踏まえて政策とそれについてのプレゼンを準備しました。完成までの道のりは非常に長く、険しいものでしたが、完成した時には達成感が得られました。当日は質疑応答に対応できるか不安でしたが、自分の発表に関してしっかりと準備をしていたので自信を持って臨むことができました。専門家の先生方からフィードバックも頂き、全米大会に向けてさらに政策を充実したものにできました。

（春名鞠慧）

政策発表会

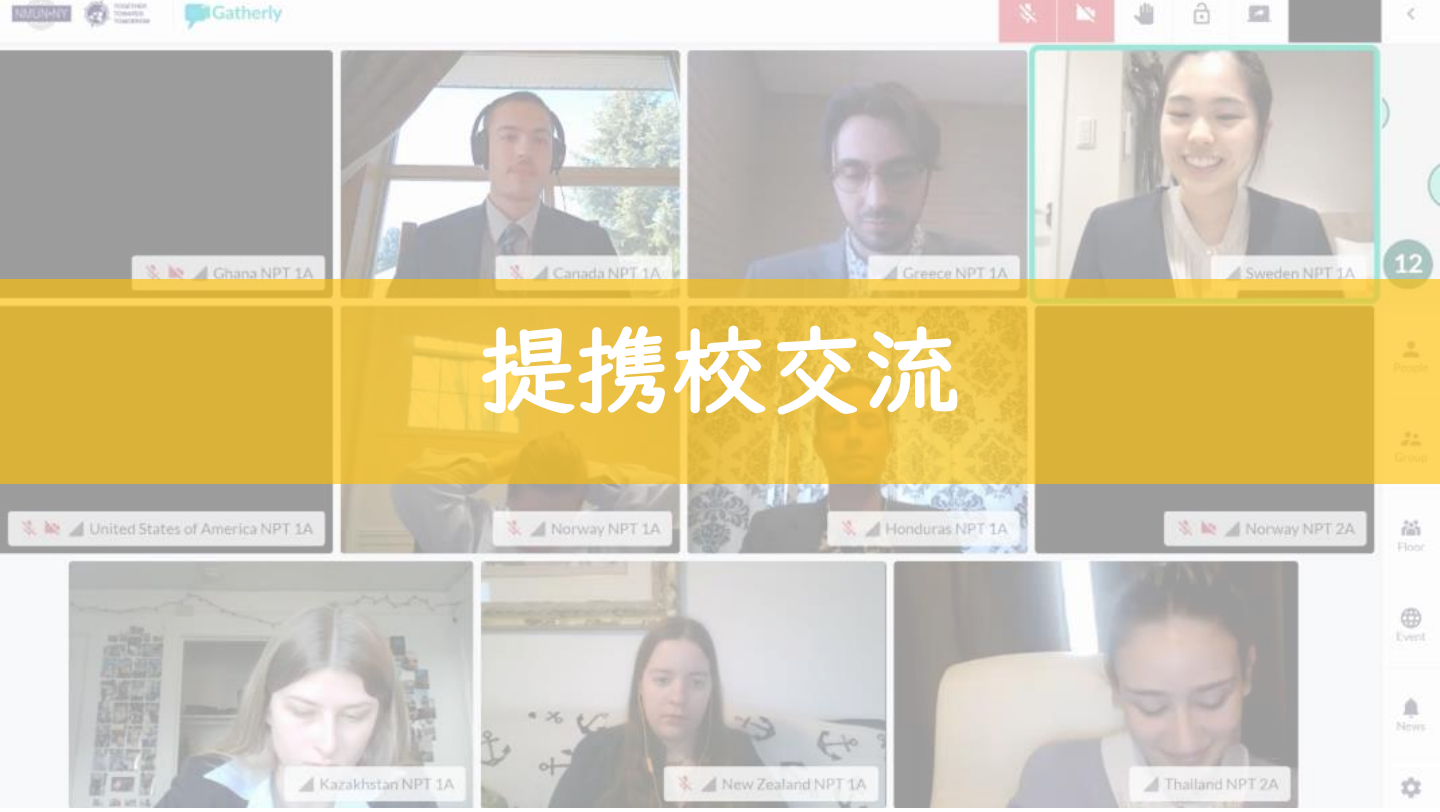
政策発表会では、数カ月に渡って考えた自分の政策を多くの方々の前で発表し、評価していただきました。私は、前日の準備段階の際に政策の方向性を大幅に変更したので少し不安がありましたが、専門家の方々のご意見や、聴衆の皆さんのアンケートを参考にしていく中で、自分の政策がブラッシュアップされていくのを実感しました。

発表に関しては今年度はオンラインでの発表だったので、リラックスした状態で臨むことができ、堂々と発言することができました。

（横澤玲奈）

渡米

・提携校交流
・ブリーフィング
・全米大会出場

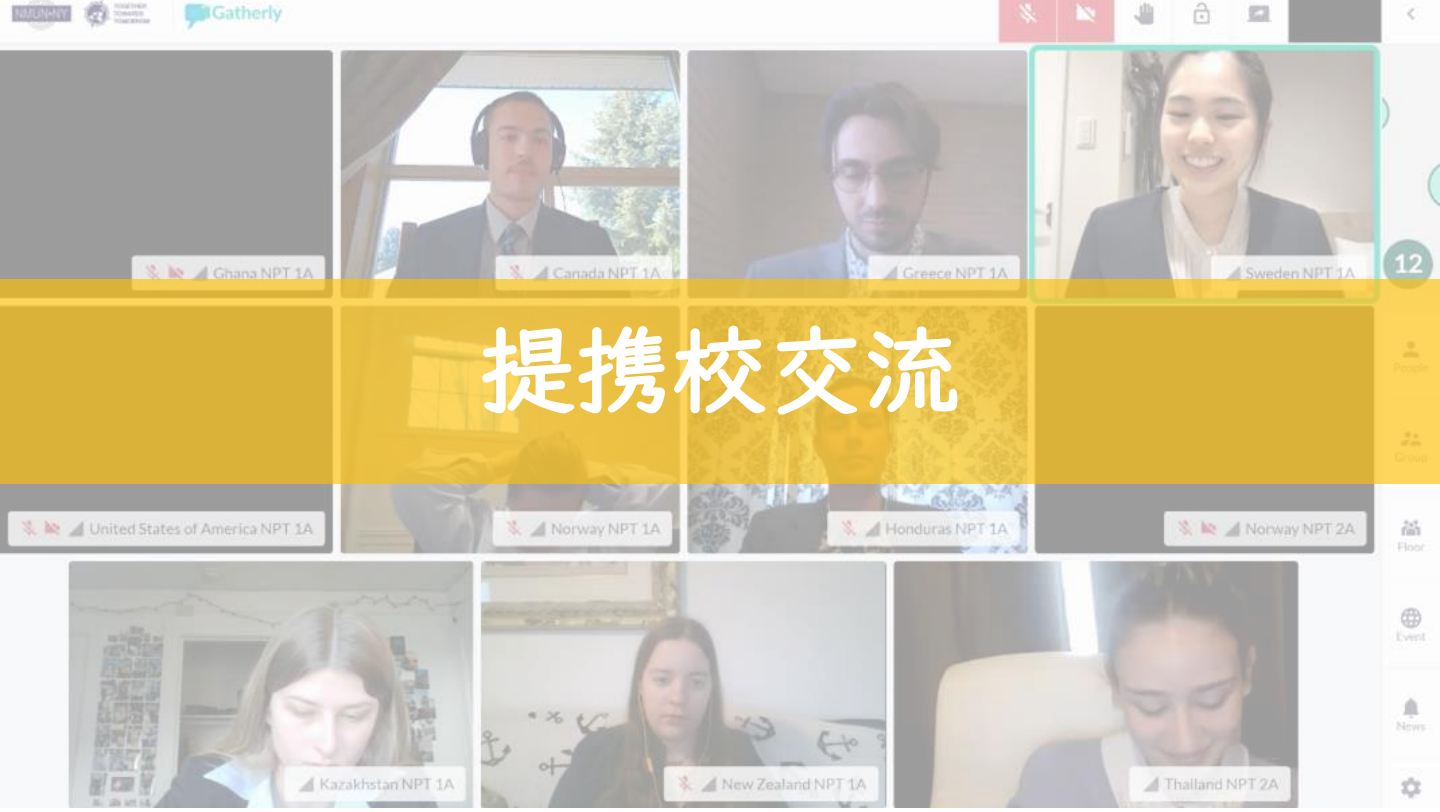


提携校交流

～全米団から繋がる交流～

全米団は毎年、アメリカの大学と提携し、合同代表団(Joint Delegation)の形で全米大会に参加します。第38代はカリフォルニア州にあるRiverside City Collegeと提携しました。

派遣団員は提携校の学生とペアを組み、会議の準備から当日まで2人で1国の大使を担当し、活動に取り組みます。自己紹介を兼ねた初めてのZoomミーティングは緊張しましたが、ペアは熱心にこちらの話に耳を傾けてくれ、模擬国連という共通の話題に花を咲かせました。議題ごとにリサーチやポジションペーパー執筆の役割分担を行った後は、約1,2週間に1度の頻度でミーティングを開いてリサーチの進捗や議題について気になるトピックを共有しました。私のペアは全米大会経験者であったため、当日の流れについても解説してくれて心強かったです。また、時には話が脱線し、アメリカでの選挙や日米の歴史観の違いについて何時間も語ることもありました。模擬国連の取り組み方だけでなく、こうした社会問題について同世代の生の声を聞くことができた点においても、提携校との交流は勉強になることばかりでした。



提携校交流

そして迎えた大会当日。Gatherlyというツールで大会に参加しながら、常にチャットでペアと連絡を取り合いました。ペアで出場する利点は、2手に分かれて複数のワーキンググループに所属できること。私たちは作戦通り多くの国にコンタクトを取り、4つのワーキンググループで作業することができました。スウェーデンの動きが褒められれば、それは2人の会議行動が認められたということです。大会中、互いに励まし合い、辛い時は愚痴をこぼし合える仲間がいることで心から会議を楽しむことができました。

(近田佳乃)

（昨年度は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)により、渡米及び提携校交流が出来ませんでしたが、例年全米団は提携校の生徒や教授と文化交流などの機会を設けています。）

ブリーフィング

～ロールモデルから得る学び～

例年はニューヨーク滞在中に、団員の興味に沿った国連機関並びに日本政府代表部を訪問します。今年は、3月上旬から中旬にかけてアメリカ大使館、UNIDO、国連日本政府代表部、UNDPの4つの機関にブリーフィングを実施していただきました。オンラインで行ったため、例年とは異なり日本に事務所がある機関の方からお話を伺いました。

局員からの声

私はNMUNでの議場がUNDPだったため、事前にUNDPの職員の方から現場の生の声を聞けたことで、文献だけではわからない一歩進んだ準備をして大会に臨むことができました。加えて、交渉術など会議中の行動に直接活かせるヒントも多く伺うことができ、非常に有益でした。また、実際に国際機関で働く方に自らの経験やキャリアについてお話しいただいたことは、自分の将来と向き合い、これからのパスウェイを考えるためにも貴重な経験でした。

(細郷有希乃)

全米大会出場

～世界の学生と外交～

5日間に渡って行われる全米大会は、約3週間の渡米プログラムにおけるメインイベントです。例年、主に会議はニューヨークのホテルにて、閉会式は国連本部にて行われます。2021年度の大会は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で史上初のオンライン開催となりました。第38代日本代表団は、スウェーデン政府代表部として各々の会議に参加しました。第38代局員·団員は、各会議でペアと協力し、DDPで練り上げた自国の政策を決議案（Draft Resolution）に盛り込み、粘り強く交渉しました。その結果、日本代表団とRiverside City Collegeの合同代表団 は、最優秀大使団賞(Outstanding Delegation Award)と3つのPosition Paper賞をいただくことができました。

団としての受賞は、今年で13年連続になります。私は全米大会では国連総会第一委員会(GA1)において「全ての側面における小型武器および軽兵器の違法取引」に関する議論を行いました。GA1では世界中から集まった約300人もの大学生がそれぞれの国を担当しており、日本の模擬国連では経験したことのないようなスケールの議場でした。

選考プロセス → DDP → 政策発表会 → 提携校交流 → ブリーフィング → 全米大会出場 → 事業運営

全米大会出場

そんな中で、自分の政策のブラッシュアップのために少人数で議論を重ねたり、自国の立場を表明するためのスピーチを行ったりと、様々な働きかけを行いました。全米大会での経験は今後の模擬国連活動に生きてくるに違いありません。

（横澤玲奈）

選考プロセス → DDP → 政策発表会 → 提携校交流 → ブリーフィング → 全米大会出場 → 事業運営

第38代の参加議場と優先議題

周雨臻
参加議場: 国連世界食糧計画 (WFP)
優先議題: Improving Food Assistance for Refugees and Internally Displaced Persons (IDPs)

細郷有希乃
参加議場: 国連開発計画 (UNDP)
優先議題: Realizing the Sustainable Goals(SDGs) for Water and Ocean Governance

河島功弦
参加議場: 国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)
優先議題: Improving Employment Opportunities for Refugees and Internally Displaced Persons (IDPs)

嶋田梨子
参加議場: 国連工業開発機構 (UNIDO)
優先議題: Promoting Sustainable Entrepreneurship and Business

横澤玲奈
参加議場: 国連総会第1委員会 (GA1st)
優先議題: Advancing Responsible State Behavior in Cyberspace in the Context of International Security

國分理桜
参加議場: 国連人口基金 (UNFPA)
優先議題: Increasing Youth Leadership and Participation in Society

春名鞠慧
参加議場: 国連環境総会 (UNEA)
優先議題: Ensuring Sustainable Consumption and Production

吉田直樹
参加議場:国連総会第2委員会 (GA2nd)
優先議題: Disaster Risk Reduction

近田佳乃
参加議場: 核兵器の不拡散に関する条約運用検討会議 (NPT Review Conference)
優先議題: Peaceful Uses of Nuclear Energy

渡米後
・事業運営
・第39代運営局紹介
・運営役職紹介

事業運営

帰国後、派遣団員は当事業の運営の担い手となります。財団や企業様、顧問の先生方やOBOGの方々などとの繋がりが深い当事業の運営を通じ、国際問題の社会的認知の推進、模擬国連活動の発展、国際社会において活躍する人材の育成を目指しています。以下運営の大まかな流れを説明します。

事業報告書作成・事業報告会：4月～6月

渡米を終えた派遣団員は団員期の経験を支援してくださっている多くの方々にお伝えするべく、事業報告書を執筆し、その後事業報告会を開催します。

選考プロセス：8月～10月

次代の選抜に向けて、選考プロセスの設計をを行います。9～10月に選考プロセスを実施して次代派遣団員の選考を行い、例年9月～10月下旬頃に決定・発表します。

団員育成プログラム（DDP）：11月～3月上旬

派遣団員の決定・発表後、新規団員が全米大会で最大限の力を発揮できるように、運営局員が団員育成プログラム（DDP）を設計し、渡米までの約5ヶ月間実施します。

次代派遣：3月下旬～4月上旬

運営局員は日程調整や諸手続きなど、次代派遣団の渡米を計画し、引率や渡米中の日本との連絡なども担います。

運営代交代：6月

大会を終えた次代団員は帰国した後、事業報告会をもって代替わりを行い、運営局員は OBOGとなり後輩を見守ります。

第39代運営局紹介

運営局では各局員が役職に就き、協力しながら事業運営を行います。以下は第39代運営局員と各役職の紹介です。

役職名	氏名	所属大学・学年	所属研究会
運営統括・団長	細郷有希乃	東京外国語大学2年	国立研究会
副団長・英語団員育成プログラム(英語DDP)担当	近田佳乃	神戸大学2年	神戸研究会
総務担当	嶋田梨子	国際基督教大学2年	国立研究会
選考プロセス担当	河島功弦	一橋大学2年	国立研究会
研究担当	周雨臻	京都大学2年	京都研究会
団員育成プログラム(DDP)担当	吉田直樹	東京大学2年	駒場研究会
会計担当・渉外補佐担当	春名鞠慧	同志社大学2年	京都研究会
渉外担当・事業報告書担当	横澤玲奈	一橋大学2年	国立研究会
企画担当・広報担当	國分理桜	立命館大学2年	京都研究会

運営役職紹介

全米団派遣事業の運営は、渡米前準備や渡米と並ぶ当事業の魅力の１つです。運営局員としての任期は渡米後１年間に渡り、渡米準備と渡米を合わせた期間よりも長くなります。運営局として協力し業務を遂行する上で、運営局員はそれぞれ役職を持ちます。その決定方法や兼職の仕方などは代の方針や各自の研究会での役職によって多少異なりますが、業務を通じて、個人が運営局員として各役職において必要とされている技術・能力を向上させることで、将来の活躍へとつなげます。

運営統括

全ての役職の仕事の進捗状況の確認、必要に応じたサポートを行います。また、全国大会でのスピーチなどを含めた様々な機会における全米団を代表した挨拶や挨拶文の執筆も仕事です。渉外先へ挨拶に伺ったり、代表者会合へ出席したりもします。

団長

渡米に関する事前準備と次代団員の渡米の引率を行います。事前準備は提携校探しや提携校とのミーティング、航空券の手配、ブリーフィング調整、全米大会運営側とのやり取りなど多岐に渡ります。渡米の引率では団員の安全とスケジュールの管理が仕事です。

副団長

運営統括・団長が不在時には代表代理を務めたり、運営統括・団長を含めた全ての役職や団員のサポートを行います。また、代表団渡米期間中には、日本の全米団運営局と保護者との連絡係を務めます。

運営役職紹介

総務担当

運営における事務的事項の総括を行います。各種資料を作成し印刷したり、全米団の必要備品や全米団主催イベントの会場の手配を行ったりします。ロジスティックス作成やメーリングリストの管理も仕事です。

選考プロセス担当

選考プロセス実施・運営の総括を行います。具体的にはコンセプトやコンテンツ内容、採点方法などを決定したり、採点集約を行ったりします。また、アプライ者全員へフィードバックシートを作成することも仕事です。

研究担当

選考プロセス担当の補佐として、各種選考課題の具体的設計を行います。また必要に応じて、団員育成プログラム(DDP)の作成や実行の補佐も行います。

団員育成プログラム(DDP)担当

DDP 運営の統括を担います。DDPの考案から企画、決定まで行います。また、団員の全米大会に向けた準備の進捗管理も仕事です。

英語DDP担当

英語面でのサポートを行います。DDP 内で団員の英語力向上を目的としたコンテンツを企画して実施したり、希望者対象の個人英語レッスンを行います。

運営役職紹介

会計

全米団運営費の管理を行います。年間予算の作成などを行ったり、団費の領収書の管理をしたりします。また、航空券手配や宿泊施設予約など渡米に関する事前準備も仕事です。

渉外

外部団体との連絡を行います。渉外先への書類を郵送したり、電話やメールの対応をしたりします。渉外活動を実行したり、渉外先の新規開拓を行ったりすることも仕事です。

渉外補佐

省庁・国連機関への後援申請や新たな顧問の先生との契約、後援先とのやり取りなどを行います。それに伴って必要な各書類の作成や渉外担当のサポートも仕事です。

企画

OBOG会、政策発表会、新歓説明会、渡米報告会などの企画、運営を行います。またメーリングリストの管理や会報誌の配信を通してOBOGの方々との連絡をとることも仕事です。

事業報告書

英語版を含めた渡米報告企画書の作成を行います。原稿執筆依頼や原稿の管理、印刷業者との連絡が仕事です。

広報

全米団の活動の広報を行います。HPを作成して更新したり、FacebookなどのSNSツールを活用したりします。また、OBOG名簿やメーリングリストの管理も仕事です。

もっと知りたい全米団！

　ここまでガイドブックを読んでみて、全米団とはどのようなものかなんとなく分かっていただけたでしょうか？この「もっと知りたい全米団！」では、全米団についてより深く知っていただけるよう、第39代局員にインタビューをしました！是非お読みください！

Q.全米団にアプライしたきっかけは？

近田：英語で議論をするようなサークルに入って英語力を維持したいと思っていた矢先、全米団の存在をTwitterで知りました。模擬国連の奥深さに魅力を感じていた私はすぐに応募を決意しました。全国から選ばれた仲間と切磋琢磨する、そんな特別な空間に私も入りたいと強く感じました。コロナで移動が制限される中、世界との繋がりを保っておくのにも絶好の機会だと思いました。

國分：京都研究会の先輩に全米団で活躍していらっしゃった方がいて、その方に影響を受けて興味を持ちました。また、世界の学生と模擬国連をすることに憧れを抱いたからです。

春名：同じ京都研究会の先輩に勧められて応募しました。全米大会で世界の学生と模擬国連をすることとブリーフィングを通して今世界で活躍している方と直接お話ができることに魅力を感じてはいましたが、なかなか一歩を踏み出せなかった時に声をかけていただきました。

吉田：高校の時から模擬国連をしており、当時から全米団のことは知っていました。世界大会という大きな舞台に立ってみたい思いから、また学生主体で運営を行うという点に惹かれたことからアプライしました。

もっと知りたい全米団！

Q.DDPを通して最も成長したことは何ですか？

近田：「なぜ？」と考えることを意識できるようになりました。問題分析の時や自分の意見を立てる時にも、社会全体から見た文脈は何か、その視点が出てくる基礎となる自分の経験はあるか、と問いを立てて考えるようになりました。これは局員や団員同士でディスカッションと政策立案の質を高めようと語り合う中で何度も指摘され、その大切さに気がつきました。なぜなのかを考えることで構造上の問題が見えたり、一見異なると思っていた事例との繋がりが見えたりとより本質へと認識が深まりました。

國分：DDPでは、局員の方から議論の過程や結果をより的確に、より改善されたものにするにはどうしたらいいのかに関するフィードバックをいただきました。私は、団員・局員との関わりの中で、自己主張に終始し、議論を混乱させてしまいがちな性格について指摘を受けました。それを受けて、議論において目的を意識する重要性を意識するようになったことが私が最も成長したことだと思います。

春名：議論の全体像を把握するようにすることです。今までは議論の中で自分の意見や自分の役割だけに集中しがちだったのですが、俯瞰しながらも自分の意見・役割を考える癖がついたと思います。

吉田：説明能力です。全米団のDDPではディスカッションなども行いますが、プレゼン能力やパブリックスピーキング能力が鍛えられる機会も非常に多かったです。それらの全ての体験で共通していたのは「人に伝える」ことが求められるということであり、その過程で説明能力が身についたと思います。

もっと知りたい全米団！

Q.オンラインでの全米大会はどうでしたか？

近田：オンライン会議のメリットとしては、誰がどこにいるのかすぐにわかることや、文書共有がしやすいことが挙げられます。その利点はみんなで最大限利用していました。また、とてもよかったのは、自分が日本から参加していて今午前3時だと伝えると議場のみんなにねぎらってもらえること(笑)会議中もよく時差が話題になり、すぐに顔を覚えてもらうことができました。一方で、オンラインならではのトラブルもありましたが、他の大使が辛抱強く意見を聞いてくれたり、団員からアドバイスをもらったりと、心強い仲間が助けてくれました。予想外ではありますが、結果的には、思いもしなかった事態に対応するという貴重な経験が得られました。

國分：オンラインの会議では、残念ながら対面ならではの議場の雰囲気や熱気、非言語的なコミュニケーションなどを味わうことは出来ませんでしたが、画面の向こうにいる大使と必死に交渉し、密度の高い時間を過ごすことができたことが印象的でした。オンラインでも世界の学生と模擬国連をすることが叶い、嬉しかったです。

春名：オンラインであったがゆえにネット環境が悪く、公式発言ができなかったり、交渉もうまく進めなかったりといろいろ大変でした。しかし、さっきは大丈夫だった？と声をかけてくれるなど他の参加者の優しさに触れることもありました。これが対面だったらどうなっていたのだろうと思いを馳せることもありましたが、世界の学生と議論をするという貴重で、すばらしい経験ができました。

吉田：とても刺激的でした。オンラインであろうと英語で議論が進むことには変わりなかったため、多くの国から集まった、多様なバックグラウンドを持つ人々と議論することはとても楽しく、有意義であったと思います。周りの英語力も高く、圧倒されることもしばしばでしたが笑。

もっと知りたい全米団！

Q.全米大会で学んだこと／印象深かったことは何ですか？

近田：私が参加した議場は大議場だったので、大使が100人以上いる大所帯でした。その中で私の顔を覚えてもらうにはどうすればいいだろうと考えた末、事前交渉で多くの国に話しかけに行ったり、雑談をしたり、チャットでスピーチの感想を送ったりとこまめに交流を作ることにしました。すると、それがかなりの効果を見ました。４日目には「日本から13時間の時差に耐えて参加する強者」という私のイメージが浸透していたように思います(笑) 。議場で信頼を得る上で、丁寧に言葉をかけ、相手を気にかけている姿勢を見せることの大切さを改めて学びました。

國分：全米大会では、自分の英語力の不足を痛感しました。しかし、ネイティブではない国の大使は自分以外にも大勢いて、彼らが議場で堂々と自国の意見を発信している姿に圧倒されました。英語を障害に感じず、目的を持って外交を行っている彼らのように自分もなりたいと強く感じました。

春名：デリである前にお互いに一人の人間であるということを強く実感しました。１日目の会議が終わったあとに、デリたちと会話をする機会があったのですが、そこで生まれた繋がりから、大会最終日までともに協力するような仲になりました。一見交渉自体には関係なさそうなおしゃべりも人間関係を作るという意味では大事なのだと学びました。

吉田：「窮地に立つ」という経験でしょうか。英語はしっかり鍛えていたつもりですが、それでもやはり周りの英語力のレベルは本当に高く、英語が聞き取れずに議論に置いていかれてしまうこともときたまありました。しかしそういう機会があってこそ成長ができたとも思っており、「英語が苦手なりに何をするか」を考えて行動に移すという体験は貴重だったと思います。

もっと知りたい全米団！

Q.全米団の雰囲気はどのような感じですか？

近田：DDPやミーティングでは、常に他者から学ぶ姿勢があり、刺激し合いながら高みを目指している素晴らしい環境です。メンバーもそのような環境を求めてきているので、手抜きがなく、私が全力で思いや考えをぶつけられる数少ない場所です。すごく厳しい団体のように書いてしまいましたが、それはコンテンツや運営について話し合うモードの時だけで、普段は冗談を言い合ってよく笑う朗らかな集団です。

國分：全米団のメンバーは意識が高いです。団員期のコンテンツ1つとっても頭をフル回転させて挑んでくる姿勢に自分は大いに刺激を受けていましたし、まさに自己研鑽の場でした。このように、全員が真面目な空気感の中で全米団の仕事や国際問題に目を向けている一方、互いを尊敬している居心地の良い雰囲気が常にあることは間違いありません。そういった側面も踏まえると、全米団はまっすぐ前を向いて何かを成し遂げたい人には最適だと思います！

春名：DDPや政策発表会など真面目なときは鋭く、頭の切れる人が多いです。自分に対しても厳しく、しっかりとした人が多くて、とても刺激を受けることができるので、自分のモチベーションを上げられるような雰囲気です。そうではない時は、柔らかい印象の人が多いです。

吉田：一言では言えません。というのも雰囲気がその場に応じてさまざまに変わると思うので。オンとオフがはっきりしているとも言えますね。DDPや運営ミートでは忌憚のない議論を行う人たちですが、それ以外の場では一緒にご飯に行ったり雑談したりと緩い部分も多い人たちの集団だと思います！

もっと知りたい全米団！

Q.全米団を一言で表すと！？

近田：「ON/OFFスイッチの切り替え多め！」

國分：「世界に向けて仲間と高め会う自己への挑戦の場！」

春名：「切磋琢磨できる貴重な集まり」

本当に努力家が多いし、自分も頑張ろうと思えるところだなと。

吉田：「『きっかけ』の宝庫」

色々な大学から様々なバックグラウンド、能力を持った人々が集まってきます。彼らと話したり全米大会への準備を進めたりする中で多くの変化のきっかけが待っていると思います。

Dear Future Delegates

細郷有希乃
(Yukino SAIGO)

運営統括・団長

“Destiny is for losers”

皆さんは運命を信じますか？この言葉はあるドラマの主人公の台詞です。運命を信じるのは負け組。やや厳しい言葉に聞こえますが、彼女はこう続けます。運命は自分から行動する代わりに何かが起こるのを待つための言い訳でしかない、と。

人生に勝ちも負けもありませんし、自分がこれまでに行ってきたことやこれから踏み切ろうとする決断が本当に正しい選択なのかは誰にもわかりません。もちろん、運命を信じるも信じないも自由です。ただ、自分から何か行動を起こしてみることの重要性を私は強く信じています。

去年の私にとって「私はコロナ禍で何もできない大学生活を送る運命だった」と結論づけることは容易なことでした。しかし、自らの意思で全米団に足を踏み入れてみたことで、魅力的な仲間と想像もできなかったくらい充実した日々を過ごし、貴重な経験ができています。「全米団にアプライしよう」と行動を起こして良かったと心から実感しています。さて、このガイドブックを手に取った皆さんは、既に第一歩を踏み出しています。しかし、待っているだけでは何も起こりません。もしアプライを少しでも迷っているのであれば、次の一歩も行動に起こしてみてはいかがでしょうか。全米団でお待ちしています。

近田佳乃
(Kano KONDA)

副団長・英語DDP担当

「全米団が次に繋ぐもの」

高校時代の恩師に「セレンディピティを大切に」とこの言葉をいただきました。セレンディピティとは、幸運な偶然を掴む力を指します。ただし、セレンディピティはただ偶然を待っているだけでは身に付きません。幸運に気がつき、実行する力が必要です。その準備には幅広い経験を一つずつ積むことと、出会いを大切にすることが含まれると思っています。そして、私にとっての全米団との巡り合いは、セレンディピティが発揮された結果であり、同時にそれを鍛える場だとも言えるのです。

元々英語や議論に関心があった私は、大学で配られたサークル紹介のパンフレットを眺めている時に偶然にも模擬国連が目に止まり、その後全米団の存在を知りました。しかし、これはただの偶然ではなく、それを自ら求めている意識がありそのために準備していたからこそ起こり得た現象でした。全米団への応募を考えている皆さん、このガイドブックを熟読して、全米団でできることや得られる機会、またそれらが繋げてくれる未来を考えてみてください。将来を不安に思うのではなく楽しみに待ち焦がれ、全米団で育成されるセレンディピティが、近いうちに発揮される時が訪れると想像してみてはいかがでしょうか。

嶋田梨子
(Riko SHIMATA)

総務担当

“Together Towards Tomorrow”

　このフレーズは、私たち39代局員が参加した2021年度全米大会のコンセプトでした。皆さんの中には、全米大会に魅力を感じて、全米団へのアプライを検討している方もいるのではないでしょうか。

　私の考えるこの“Together”とは、仲間とともに1つの目標に達する「過程」の中にあると思います。全米大会では、実際に各国の大使と協力し、交渉を通して文言をまとめるという1つの目的に達することで“Together”を経験出来ました。しかし、全米団の魅力はそれだけではありません。団員・局員含めた仲間と共に高め合いながら活動し、学べることもその1つです。これまでDDPや全米大会、運営など全ての活動において、勿論楽しい一面もありましたが、大変で困難に直面することもありました。そんな時に支えになったのが、共に乗り越えてきた仲間です。互いに指摘し、助け、刺激し合う過程の中で“Together”の大切さを実感しています。

　このように、全米大会のみならず様々な活動を通して仲間とともに成長できる全米団では、何にも代え難い貴重な経験を積めます。一緒に活動してみませんか。

河島功弦
(Kogen KAWASHIMA)

選考プロセス担当

「時務を識るを英傑とす」

この言葉は、『十八史略』における「水魚の交わり」からの一節です。「時務（その時の世の中において為すべきこと）を理解していることがリーダーには求められる」という意味です。

模擬国連は教育的機会です。言い換えれば、何かを学ぶことを目的としています。何を学ぶか、それは最終的には皆さんが自ら決定することですが、ここでは私が思う「全米団で学ぶべきこと」を上の言葉に託しました。

全米大会では、問題設定力・問題解決力が問われます。その際重要なのは、「問題のどこにどう対処すべきか。最善手は何か。」という視点です。最善手を打つには、これまでの事例（過去の棋譜）を学び、現状（現在の局面）を正確に把握し、起こりうる結果（一手先の局面）をただしく評価する必要があります。これを戦略的思考ということができるでしょう。付言するに、この戦略的思考は大会準備のみにおいて必要なのではなく、大会当日においても「どう動くか」という観点から求められます。つまり、会議での一挙手一投足にも戦略的考慮が働き得るということです。

「時務を識る」の部分に戦略的思考のエッセンスが含まれていると言えるかもしれません。皆さんにとって全米団が「時務を識る」ための学びの機会になることを願い、私からのメッセージとさせていただきます。

周雨臻
(Yu-Chen CHOU)

研究担当

「コンフォートゾーンからの脱却」

　これは夢を追いかけ、より良い自分と出会うために必要なステップだと思います。今まで見たことのない景色を目にし、育った文化の違う人と出逢ったりすることは、コンフォートゾーンを抜け出した後にしかできません。勇気を持ってコンフォートゾーンから一歩を踏み出さなければ、視野は広がらないでしょう。

　もちろん言葉通り、コンフォートゾーンの外には「コンフォート」ではなく、多くの困難とチャレンジが待っています。そこから逃げ出してしまうこともできますが、それらの挑戦を乗り越えなければコンフォートゾーンはまず広げられない上、夢に向かって一歩前進することもできません。

　このガイドブックを読んでくださっている人の中に、選考に応募しようと考えている人がいる一方、申込むことに躊躇している人もいるかもしれません。どちらにしても、私はJulius Caesarの言葉を最後に伝えたいです。"I came, I saw, I conquered." 全米団の存在を知り、見て、そして挑戦してみませんか？

　夢に向かって進んでいけるよう、一緒に頑張っていきましょう。

吉田直樹
(Naoki YOSHIDA)

DDP担当

「非日常に飛び込む」

　ここまでガイドブックをお読みになられている方々の中には、「面白そう。挑戦してみよう。」と思った方から、「不安だな。アプライをして後悔しないだろうか。」と思った方まで様々だと思います。

　いずれにせよ、私が全ての方に言いたいのは「自分の気持ちに素直になって欲しい」ということです。全米団が渡米事業やDDPなど他の団体では味わえないような「非日常」を皆様に提供すること請け合いです。しかし人間というものはそれまでのコンフォートゾーンから新しい環境に飛び込もうとする際に躊躇や逡巡をしがちです。その原因は多くの場合、理性によるものです。理性による現状への冷静な判断は多くの場合とても重要ですが、それが時にあなたから大事な挑戦の機会を奪ってしまうこともあります。

　「非日常」に飛び込むには勇気が要ります。しかし、もしその「非日常」を手に入れたい気持ちがあるなら、その気持ちに素直になってみませんか。冷静にならずにとりあえず挑戦してみませんか。そして挑戦した後、がむしゃらに努力する経験をしてみませんか。この言葉が、皆様の一歩踏み出す勇気になってくれれば幸いです。皆様にお会いできることを楽しみにしています。

春名鞠慧
(Marie HARUNA)

会計・渉外補佐担当

「世界を動かそうと思ったら、まず自分自身を動かせ」

言わずもがなよく知られた古代ギリシャの哲学者ソクラテスの言葉です。このガイドブックを読んでくださっている方は、何かしら「世界」に興味がある方が多いと思います。中には全米団って敷居が高そう、周りがすごくて埋もれそう、など心配に思う方もいるかもしれません。

全米団では、実際に世界を動かす取り組みをされている方々や、これから世界を動かすような同世代と出会うことができます。そのような貴重な機会を得られるのが全米団の特徴です。また全米団を通して多くの方々が世界へと羽ばたいています。OBOGの方との交流もあり、さまざまな活躍をされている方からお話を聞く機会もあります。私は、このような全米団の活動を通じて生まれた人との繋がりが一番自分自身のマインドセットの成長に繋がったと思います。

世界を動かすにはかなり長い道のりを経る必要がありますが、全米団は間違いなくその足がかりの一つになるでしょう。全米団へのアプライを迷っている方、ソクラテスの言う通り、まずは自分自身を動かして、世界を動かす一歩を是非踏み出してみてほしいと思います。

これから世界を動かすであろうみなさんと全米団で出会えることを楽しみにしています。

横澤玲奈
(Rena YOKOZAWA)

渉外・事業報告書担当

「流るる水は腐らず」

　この言葉は、常に流れている水が腐ったり沈滞しないことと同じように、常に思考したり活動していたりする人は落ち込まず停滞もしないという意味のことわざです。「淀む水には芥たまる」とも言います。

　このガイドブックを手に取っている皆さんの中にはアプライするかどうか迷っている方も少なくないと思います。選考に対して不安を抱えている方もいると思います。もちろん、全米団はあくまでも皆さんの多様な大学生活の中における過ごし方の選択肢の一つでしかありません。選考も、進んでいく中で大きな瀬を目の前にして挫けそうになってしまうことがあるかもしれません。しかし、その時のあなたは決して「淀む水」ではなく、「流るる水」であるはずです。そして、全米大会のみならず、DDPやブリーフィングなど全米団での豊富な経験やそこで抱くであろう種種雑多な感情、思考の過程は、模擬国連に携わっている、あるいは携わろうとしている皆さんにとっては特に、速い流れに思えるでしょう。

　皆さんとは、全米団を通して日々周りの流れを巻き込みつつ、流水、あるいは激流となって大きな海を目指すことができれば幸いです。アプライを心からお待ちしております。

國分理桜
(Rio KOKUBU)

企画・広報担当

「模擬国連からみる外交」

私は、模擬国連の特徴の1つに「交渉」があると感じています。交渉とは、ある事柄を取り決めようとして相手と話し合うことですが、意思決定の主体が自分と相手、両方である点が意見表明、スピーチやディベートと異なります。模擬国連の会議では、議題に関して各国が国益を追求しつつ、問題解決に向けて合意形成を目指します。

なぜ交渉について触れたのかといいますと、全米団が出場する全米大会に於いても交渉が鍵となるからです。全米大会では各自が持ち寄った政策をよりブラッシュアップし、決議案として提出するために、似た政策を持った国と交渉します。問題解決のための提案を、両者の合意として国際社会・国連の意思として世界に発信するために、主権国家が互いの信頼の上に積み上げていく交渉こそが外交です。私たちは以上の過程を通して、本物の国連で行われている外交を体感することができました。また、こうした問題解決のために自国の国益だけではなく、国際益を意識するため、国際協力の意義を理解しました。

国連とは何か？外交とは何か？一度深く考えたい人はぜひ全米団で活動することをオススメします。

よくある質問

Q. 2022年の3月に全米大会は対面で行われますか？

現時点で2022年の全米大会は対面で行われる予定です。ただ、これからの感染状況などを踏まえて世界中から参加者が集まるのが難しくなった場合、オンライン開催に変更される可能性もあります。これからの情勢に左右され、かつ全米大会が判断するものなので、変更の場合もありますし、確定的なことは申し上げられないことをご容赦ください。ただし全米団といたしましては、開催の形態に関わらず全米大会には参加し、渡米できる場合には渡米して参加する予定でおります。

Q. 渡米費用はどれくらいかかりますか？

例年、自己負担金15万～20万円前後で渡米します（現地での食費や生活費は含まれていません。）。毎年参加費は変動しますが、例年団員選出後、年内に集金を行います。学生にとっては少しハードルの高い金額かもしれませんので、ご家族などと事前に相談した上で申し込むことを強くお勧めします。もし、渡米ができずオンラインで全米大会に参加になってしまった場合や全米大会が中止になってしまった場合、お預かりした自己負担金は返金いたします。ただし、航空券などのキャンセル料がかかってしまう場合もございますので、ご了承ください。

Q. 倍率はどれくらいですか？

例年2～3倍です。

よくある質問

Q. DDPや事業報告会で東京に行く回数はどれくらいですか？

代によって異なりますが、例年全員が東京に集まる回数は団員期、局員期合わせて10回程度です。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、昨年度は初回DDP以外は全てオンラインで開催しました。（例年：11月、2月下旬、3月の全体 DDP、 2月上旬の政策発表会、6月の事業報告会）

Q. 英語力はどれくらい必要ですか？

全米大会出場を前提としているため、英語で書かれた文書を理解でき、スピーチや海外の学生との議論、交渉を英語で行える程度の力が必要です。また、アメリカの提携校のペアと共同で準備を進めるため、英語でのコミュニケーション能力も重要です。しかし、選考プロセスにおいて、応募者の方の英語力だけでなく多様な能力を考慮します。また、英語力を上げるコンテンツを DDP 内でも実施しますので、自分の英語力に自信がない方でも諦めずにアプライしていただきたいです。

よくある質問

Q. 選考プロセスの情報が欲しいです！

基本的に選考プロセスに関する情報は全米団のホームページや公式Facebook、Twitter、LINE@、全米団メーリングリストでお知らせしています。現時点でお知らせできる情報は以下の通りです。

【選考日程概要】

7月下旬：応募要項公開

8月1日：応募開始

9月上旬：応募締め切り

9月～10月頃：選考実施

10月末：団員発表

選考への応募、及び選考課題の概要に関する詳細は、7月下旬に公開予定の応募要項に記載いたしますので、そちらをご確認ください。

Q. 全米団についての情報はどこから手に入りますか？

基本的には全米団のホームページや公式Facebook、Twitter、LINE@、全米団メーリングリストなどのSNSで発信しています。

全米団ホームページでは、当事業に寄せられるご質問に対する回答をまとめた「模擬国連会議全米大会日本代表団派遣事業 FAQs」 が公開されておりますので、そちらもご覧ください。そのほか、疑問点やご相談がありましたら、 SNSを通じてお気軽にご連絡ください。また、お知り合いの全米団員にもお気軽にお声掛けください！

HP・SNSのご案内

全米団公式HP

各種SNS

Facebook

Twitter

Instagram

YouTube

LINE

その他

全米団では全米団メーリングリストを運用し、当事業主催の各種イベントのお知らせをしています。登録ご希望の方、何かご不明な点がある方は総務の嶋田までお尋ねください。

総務：ga_nmun@jmun.org

助成団体・後援先紹介

協賛財団・企業様

以下敬称略
公益財団法人　関西・大阪21世紀協会
公益財団法人　双日国際交流財団
公益財団法人　平和中島財団
公益財団法人　三菱UFJ国際財団

後援団体様

以下敬称略
外務省
国連開発計画(UNDP)駐日代表事務所
国連工業開発機関(UNIDO)東京投資・技術移転促進事務所
国連広報センター
在日アメリカ大使館(渡米プログラムのみ)
文部科学省